

ゆりかごから墓場まで 2

ともに闘う、同志として

西前マリ子さんと麦の芽の35年



地域ホーム管理者

菅原裕子

総合支援

田原左世利

2016年9月26日、74歳の西前マリ子さんは熊本県天草下島の崎津天主堂を訪れました。キリシタン殉教の島、その漁師町にひっそりとたたずむゴシック様式の豊敷きの教会です。死ぬまでに一度は行ってみたい、自分のこの目で見てみたいとねがい、訪れた隠れキリシタンの地。聖堂のマリア像をうやうやしく見つめるマリ子さんの瞳に映るもの、脳裏に去来するものは何だったのでしょうか。迫害され、命を奪われても、信じるものを守り通し、自らの真実を曲げずに闘った隠れキリシタンの生き方が、マリ子さんの生き方にふっと重なります。

西前マリ子さんは脳性まひの障害をもっています。高齢になった

今は自力で動くことがむずかしく全介助の生活です。天草へは鹿児島市から車とフェリーを乗り継いで行く日帰りの旅でした。車中、マリ子さんは車の助手席をフラットにしてひたすら眠ります。疾病や怪我、情緒不安定や心因性の症状など、高齢による心身のトラブルもありながら、マリ子さんはマリ子さんらしく生きています。

「この人たちにうつって、いけば、なんとかなるー」

1980年のある日「一緒に共同作業所づくりをしましょう」という手紙が24歳の青年のもとに届きます。送り主は、鹿児島県に共同作業所をつくらうと話し合っていた鹿児島県障害者問題研究会に所

属していたマリ子さんとそのなかま。この呼びかけに青年は応えます。

1982年、マリ子さん宅を改装した約40㎡の麦の芽共同作業所がオープンしました。最初の仕事は割りばしの袋詰めや乗づくり等。「重度の障害者が社会で働くなんて、とんでもない、できるわけがない」という世間にある差別、偏見のなかでの快挙でした。働くことは、障害のある・なしにかかわらず、障害が重い・軽いにかかわらず、誰もが享受し、保障されるべき、人間として当たり前の権利なのだということを実証する実践が始まったのです。

専従職員となった青年（現専務理事）は「この人たち（マリ子さ



▲2016年11月、二度目の天草の旅。前回行けなかった隠れキリシタンの里を周遊。大好きなスタッフと一緒に。

るのです。

働くことについて、マリ子さんの2編の詩の一部を紹介します。

一つは、（働くことは嫌いな言葉でした。身体が不自由な私たちを拒否しているようで…）。

障害者は「働けない人」というレッテルを貼られていた、作業所開所当時の世間の風を表しています。もう一つは、（私はいつまでもなかまたち、そして出会ってきた人たちを愛し続けていたいから、明日も働きます）。これは「どんなに重い障害があっても、地域で働きたい、人や社会の役に

立ちたい」というねがいのもとで作業所の実践がすすんでいった時期のものです。

「埋もれていた誇り」が呼び覚まされたかのような凛とした響きを感じます。人間が働くことの本質をとらえた言葉といえないでしょうか。マリ子さんは、麦の芽が社会福祉法人となった最初の認可施設「ワークプラザ麦の芽」（1993年開所）で、74歳の今も、詩作の仕事に励んでいます。

「地域で一人暮らし」「なんとかなるのよー」

1985年9月、マリ子さんのお母さんが亡くなりました。親亡



▲古希のお祝い。「マリ子さんはみんなの宝 お誕生日おめでとう」と書かれたケーキプレートに、笑顔のマリ子さん。

き後の生活の場づくり、一人暮らしを支えるしくみづくりがいよいよ切実なものになりました。重い障害のある人が地域で一人暮らしできるのだろうか？ マリ子さんを囲んでスタッフやボランティアは悩みました。当事者であるマリ子さんが最も不安ではないだろうか？と心配していた矢先、マリ子さんはきっぱりと言いました。「なんとかなるのよー」。「きょうどうの力で切り拓くことができる」という確信がこの言葉の根底にはあります。「ひとりではみんなのために、みんなはひとりのために」というきょうどうの精神、ねがいが、「できない」を「できる」に変えていく原動力になるのです。そのことを改めてマリ子さんから学びました。

地域で一人暮らしをしてみたいと望むなかまは、マリ子さんのように親を亡くして生活の場に困っているなかまだけではありませんでした。病院病棟で療養しているなかま、施設に入所しているなかまのなかにも地域での自立生活をねがうなかまが多かったです。

叶わぬ夢とあきらめていたなかまにも呼びかけ、地域生活の実現をめざすための学習会「生活設計懇談会」を発足（1992年）させ、ねがいを出し合う場をもちま

んたち」についていけば、彼らに学びさえすれば、なんとかなる！」と直感したといいます。この直感こそが麦の芽の理念の芽になっていったように思います。

すなわち、それは障害のあるなかまのためにやらねばならないと気負うのではなく、なかまのねがいを真ん中に据え、学び合いながらとりくみを進めていけば、自ずと道が開けていくはずだという楽天主義、人間への信頼感が基底にある言葉といえます。上下関係のない対等平等な人間として、なかま・家族・職員がつながりあうこと——これが今日に至るまで、いわば麦の芽の通奏低音となっています。

した。ヘルパーやボランティアの支援を得ながら、マリ子さんは、2名のなかまとともに、福祉ホーム「ゆめ畑アパート」（自主事業）で一人暮らしを始めます。

その後、暮らしの場づくりは、麦の芽のなかでも広がり、1998年には初の認可福祉ホーム「自立ホームゆめの里」が開所します。今では福祉ホーム3カ所、グループホーム5カ所、自主事業の地域ホーム3カ所となり、ホーム入居者は総勢100余名の大所帯になりました。

ホームづくりでは、かつての「生活設計懇談会」のように、ホーム建設の前から、入居予定者が集い、不安を出し合い、希望を語り合い、互いの顔を見て、みんなと一緒に同じホームに住むというイメージをふくらませ、自分の部屋は自分でデザインするなど、なかまの暮らしをなかま自身のものにしていくプロセスを大事にしな

「ねがいはさうじで、エンディング実践

マリ子さんは今、高齢期を生きています。高齢期のなかまを支える実践、エンディング実践に試行錯誤しながらとりくんでいます。マリ子さんは、加齢による変化